

「台湾のWHO参加 認めて」

しゃ・ちようてい 1946年台北生まれ。71年台湾大学政治学系卒業。72～76年京都大学大学院法学研究科に留学した(博士課程修了)。弁護士から政界に転じ、高雄市長や行政院長(首相に相当)などを歴任。与党の民主進歩党(民進党)の重鎮として知られ、2016年6月から現職。



9日、観光客らと記念撮影
北市の夜市「山中正統廟前」

三年間にわたり続いた新型コロナウイルス禍は、ようやく落ち着き、地球規模のパンデミック(世界的大流行)という長い暗闇のトンネルから抜け出したような気分だ。台湾や日本をはじめ、各国の水際対策が緩和され、閉ざされた国境が開放されて海外旅行も再開しつつある。台日間の人的往来も徐々に回復してきた。日本政府観光局の統計によると、今年三月の訪日台湾人旅客数は二十七万人余りに達した。ゴールデンウィークに台湾を訪れた日本人も増えた。このような交流が再び戻ったことは喜ばしいが、依然として存在するリスクにも注意を払う必要がある。

ポストコロナ時代に入っただけとはいえ、コロナウイルスやサル痘などの各種感染症は姿を消したわけではない。新たな変異株がいつ現れるかはわからず、大規模集団感染も再発する可能性がある。台湾は、国際交流再開後も、台日の人々の健康と安全を守る責務を果たす必要がある。そのため、台湾を世界保健機関(WHO)の国際的枠組みから除外するので

謝・駐日代表が寄稿

二十一日からスイス・ジュネーブで世界保健機関(WHO)総会が始まるのを前に、台北駐日経済文化代表処の謝長廷代表(駐日大使に相当)「写真、同代表処提供」が本紙に寄稿した。台湾はWHO総会への参加を求めているが、中国と距離を置く英米政権の発足以降は中国の反対によって実現していない。



「ポストコロナに防疫で貢献」

はなく、「WHO年次総会」への出席など、柔軟にWHOへの参加を認めるべきだ。WHO年次総会に出席できれば、台湾は高品質の医療・福祉や、デジタル化された「全民健康保険」などの先進的制度、ポストコロナ時代の新たな防疫経験などを世界と共有し、全人類の健康の促進に貢献できる。WHOが掲げる「Health for All」(すべての人に健康を)の目標に、台湾は力を尽くす意欲があり、その能力もある。

残念ながら、台湾は二〇一七年から連続六年、WHO年次総会に出席できなかった。台湾の排除は、本来共有できたはずの台湾の知見や協力などを排除するに過ぎない。それは台湾にとってのみならず、日本と世界にとっても大きな損失となる。台湾をWHOの枠組みに組み入れれば、より健康的、より安全、より良い世界を作り上げることに寄与できると確信している。

この場を借りて、改めて長年にわたる日本の台湾WHO参加へのご支持に対して感謝の意を表したい。参議院は二年に台湾のWHO参加を支持する決議を全会一致で可決した。また、四十七都道府県のうち、四十三の地方議会も台湾のWHO参加を支持する決議案を可決している。さらに、先月の先進七カ国(G7)外相コミニケにも、台湾のWHOへの意味ある参加に対する支持が表明された。日本は台湾の良き友人であり、常に台湾の側に立っていることに、われわれは心強く感じている。コロナ禍で、日本は台湾が一番困っている時にワクチンを送ってくれた。台湾もマスクなどの医療物資を日本に届けた。台日がコロナ禍の際に「持ちつ持たれつ」で共にこの災いを乗り越えたように、コロナ後においても引き続き互いに手を携えて助け合い、双方の人々の健康を守っていききたい。

台湾が日本と助け合っているように、台湾に世界各国と助け合う機会も与えてほしい。それには台湾のWHO参加が不可欠だ。国際交流が再開したこのポストコロナ時代に、台湾の参加があって初めて真の「Health for All」が達成できる。(寄稿)